

日本の教育とキリスト教——序章——

関 屋 光 彦

「日本の教育とキリスト教」という表題を掲げたが、「これからの日本の教育とキリスト教と」題した方が、考察し論じようとする究極目標を一層判然と表示し得たかもしれない。ともかくこの意味に於て表記テーマを取扱う為めには、先ず現代日本の精神状況を全般的に頭に入れておかねばならぬ事は申す迄もないであろう。之に加えて筆者は、これからの日本が一体いかなる精神的思想的乃至は文化的な課題を有っているかの考察の必要を感じる。この考察は教育の問題、そして教育と宗教——キリスト教の問題を考える為めの前提をなし、基礎を供することになると考えられるからである。そこで序章として以下のテーマを新たに起し、そのもとに考察を進めて行く。

現代日本の精神的課題

第二次世界大戦に於て破局の運命に立至り、敗戦の惨苦を嘗めた日本は、その後次第に立直り、戦後すでに十数年を経過した。「敗戦」という事も、時間的のみならず心理的にも、漸く過去の後方に押しやられた感がある。そして昨今では、日本は国際社会の内にならびて独自の地位を確立し、ゆとりを以て自らの歩みについて反省し、一層主体的に、明確な意識を以て前進し得る境涯に立ち得たと言って過言ではないであろう。それ故敗戦直後以来、或いは識者により唱えられ、或いは国民それぞれにより思いめぐらされて来た事どもの内から、整理して、「これからの日本は一体いかなる課題を担うべきであるか、また仕遂げてゆかねばならないか」につき一層明確な意識に立つことは、緊要不可欠であり、また深甚なる意義を有つと言わねばなるまい。政治、経済、産業、社会生活、そして文化、学問等あらゆる分野においてこの事は妥当するであろう。ともあれか様に確固たる課題の意識に立つこと、換言すれば世界史の進展に際し、日本は日本なり

の役割を分有しているとの自覚並びにその役割は何であるかを出来るだけ明確にしておく事は、国民として日本人として生きる上の切要事と考えられるのである。

ところで「精神生活」乃至「思想生活」というものは、国民或いは日本人に共通して存するものであり、上記諸分野いずれもの営みに有機的なかかわりを有ち、諸般の生活の基底に存し、それらを左右した方位づける。かような「精神生活」の面に於て、日本人は、国民として又日本人として課題を有っており、他国民他民族に依って肩代りして貰うわけにはゆかない何等かの役割、すなわち精神的課題を担っていると私は考える、——たとえその或るものは他国民他民族と共通し、その或るものは共通であり乍らも特異の色彩^{ニュアンス}を有ち、その或るものは、日本の置かれている立場からも、特に日本にもとめられ、課せられているものであろうとも。以下略述するところは、かような精神的課題と考えられる幾つかについてであり、筆者が国民の一員として、一個の市井人として、そして少しく学問研究と教育の仕事に従事して来た者として省察した諸点のスケッチである。

その一つとして先ず挙ぐべきは「平和」である。より尽した表現を取れば「平和愛好の国民となること」であり、「その様な者として生きること」である。これは、これからの日本人の国民的な精神的課題の最も基本的なもの1つとすべきではなかろうか。実践的、倫理的乃至宗教的な課題としてである。口に「平和」を唱えることではない。唱えるよりも先に、「平和」を生きることを意味する。また、政治、外交の面に於て「平和」が標榜され、時の政府に依って平和主義が国策として把持されるなどに尽きるのではない。もっと根深い、国民の精神生活の基底に存すべきものとしてであり、国民生活の基調 Grundton を形成するに至る生活原理或いは主義 cause としての「平和」を意味する。従ってこの課題への意志決断が総体としての国民により確固として遂げられ、右に傾かず左に揺らぐことなく、この新たに生活の内に取込まれた課題が同時に主軸となり、国の歩みが堅実に進められる時、過去の日本は如何様であったにせよ、これから

の日本人乃至国民の行き方は「平和愛好者」のそれである、との客観性を[●]かち得るに至るであろう。否更に、「平和を作る者 peace maker」、すなわち周囲に平和をもたらし、人と人との心を繋ぎ、国と国との和解の招来に益ある存在である、との境位にまで達し得なければならない。このような国民的乃至は民族的特質を結果し来るような「平和主義」こそ、われわれの精神的な、そして根本的な課題として定立するに値いするものと筆者は考えるのである。

しかしかかる主張に対しては、やはり批判も起れば、数多くの反論も提起されるであろう。「1個の理想論としてなら兎も角だが、『平和』を国是とし、之を必須なる国民的課題として、国民或いは国家が一路この道に励進するなどという事は、政治論としてでなく精神論としてであっても、至難の業或いは非現実的な議論で、現実的には意味が乏しい」など。個人としてなら未だしも、国家が、国民が「平和」を主義として立ち、一貫して変らない、という事は現実には考え得られぬほどの容易ならぬ業である事はよくわかる。しかし筆者は次のような一観念に思い到り、之に支えられ、之をテコとして、この課題が課題として成り立ち得、現実的に推進され得ると考えてみた。その一観念とは「罪なき者が、罪ある者のために苦しむ——労苦する」といふ命題である。

この命題は人生の現実である。家庭にせよ、諸の共同体にせよ、そこに所謂「濟度し難し」と思われるメンバー（メンバーの名に値しないメンバー）の共存する場合であっても、なお且その共同体の平和が保たれ、生活が維持され、目的も亦達せられて行くのは、その中にたとえ少数なりとも存在する、忍耐強くて愛心に富み、平和と正義を愛して義務感の旺盛な誠実な人々に帰される、との事実、われわれは屢々遭遇する。すなわち「隅の^{びや}首石的存在」或いは「縁の下の力持」あらばこそ、という事実また原理は厳存しているのである。

要するに「平和」という cause、生活原理に立って終始渝らず、「隅の首石」的役割りも「縁の下の力持」的仕事も敢えて厭わないという積極的

な心構え——これは「大勇」だと思ふ——に立つ時、「平和」は促進されるのではなからうか。「罪なき者が労苦する」「隅の首石的役割をいとわぬ」「縁の下の力持的な仕事にも甘んずる」、か様な心構えは単に個人倫理の問題たるに止らず、国民としての心構えとして、国民生活の基調をなしてよいものと筆者は考える。日本人又国民が、かような目に見えては実益が得られるとも思われないこの課題に、上記の様に根本からの心構えをきめてかかる時、意想外に「平和」の現実は随処にもたらされるのではないかと思ふ。

近代的な合理主義の見方からは、かような考え方は受け容れられないかも知れない。しかし合理性を含みつつも、なお之を超えて高く深い宗教のもたらすリアルなエネルギーに支えられるとき、上の主張や提案は現実的な実践論たり得ると思ふ。

なお茲に是非とも言及すべきことは、かような課題は、日本人また国民のものとして設定されるに先立ち、まず人間としての個人により、自己自身に対する課題として、明確にして確固たる自覚と把握が得られねばならないこと、そして、個々人によりそれが仕遂げられて行かねばならないこと、すなわち個人が基礎で、創始者で又遂行者であらねばならぬという点である。カール・ヒルティの言として知られる次の1節¹を想起せざるを得ない、「平和は先ず、何よりも平和を愛し、平和を来らしめる力を有った個々人の心に熟さねばならない。そうすれば平和は徐々に国民間に成立つものであって、その時までは成立ち得ない。」従ってこの課題は「平和的人間への形成」というテーマに帰着することとなる。之は教育の問題であり、これからの時代の教育の基本的課題と考ふべきものと思ふ。しかして又それは、上述の考察を以てすれば、人間倫理を全うする力と叡知を有つ宗教との関連に於て考えられねばならない。

従って本項で提起した課題は、それが「遂行さるべし」とならば、帰するところ教育の問題であり、又之と接渉する宗教の問題となるのである。

第2の精神的課題として、次の項が考え得られると思ふ。「国民的連帯

感情の醸成」。かつてポール・ゴールチエというフランス人が、「フランス精神」という書²を著したが、著者はその始めに次の様に言っている。

「フランスという国は、あらゆる諸国家のうちで最も多様性に富みながら、最も1つであるのだ。そしてまたあらゆる諸国民のうちで、フランス国民は、最もよく1つに結合されていながら、最も相異せる諸タイプを包含している。

フランスはまことに1個の魂である云々」と。

この言葉を機縁として日本の現状をかえりみる時、現今の日本人は精神的に1つの結合を有っているであろうか。国民に共通した基本的な連帯感・は実存しているであろうか。次のことは言えるであろう、「原爆による敗戦を経験し、原爆による惨禍の余燼を今日なお眼前に見ている立場から、戦争を忌み嫌い、原水爆禁止、核実験停止については強い要望と主張を有って居り、それは国民的な輿論と言えるほどで、この点国民としての共通面が認められる」と。しかし考えて見ればそれはネガティブ（消極的）な意味に於ての一致であり、否定的な意義と価値との見出される共通面、共同意識の段階を出ないものと思われる。精神的観点に立つ時、より積極的で建設的な創造的価値と意義とを有った共通感情又は連帯感情、況んや精神共同体の意識などは、日本人また国民の全般を通じては未だ認められないと言うほかないのである。

過去の日本、太平洋戦争終熄以前の日本との何たる対比(コントラスト)であろう。しかし過去の日本に有ったものは、国民的な連帯感情というよりは、齊一(uniform)な国民感情と言うべきもの、家族主義的な、国家主義的な観念にもつばら基礎をおくものであった。それは、民主主義的精神また国際的精神を疎外し、未だこれらとは両立し得ない性格のものであった。

それ故ここに提起する「国民的連帯感情の醸成」という課題は、過去への郷愁或いは復古主義に発するものではない。世界性を欠いた「過去」に執着し、そこに復帰を望むのは、前進でなくて後退である。しかしながら、これからの日本人乃至国民として、人類的、普遍的立場からは認肯定

される特色と価値有る「国民的連帯感情」は、有ってよい、それどころか必要なのではなからうか。日本人が日本人である限り、そして国民的存在として世界にその地位を確保する意義、必要、権利の存する限り、特色ある民族的性格は有って然るべきであり、国民としての連帯感を感じしめ、自覚せしめるような「連帯感情」は興っていてよいし、興るべきだと筆者は考える。

問題の考察に具体性を与える為、「国歌」の問題を取上げて考えてみたい。「敗戦後の新生日本に、凡ての国民により、欣然相和して歌われるような国歌なるものありや」との問いに対し、われわれは答弁に窮する。「君が代」は現今なお国歌なりや、これは議論の岐れる所である。形式的に言って、依然今日そうなのか。形式論を棚上げにして実質的に考えれば、敗戦後すでに独立も回復し、年月を経た「世界に於ける日本」に新しき国歌乃至は国民歌が、すでに生れ出ているもよい時期ではなからうか。しかもなお、未だこの事実を見ない処に、「国民的連帯感情」が日本人の間に、未だ興っていない、少くも熟していない現実を思わせるのである。

再び事例をフランスに藉りるとする。その国歌「ラ・マルセイエーズ」について。フランス人は——さきのゴールチエからの引用にも述べられてある如く——個性的或いは個人主義的で多様性に富み、思想的にも鋭く相対立する両極にそれぞれ属する人々を擁し、政治的な立場、見解に至っては、他の西欧諸国に類を見ないほど多元的でありながら、一たびこの国歌に対する時、心一つに相和し、荘重に、尊敬と親愛の情をこめて斉唱合唱するのである。英国人、米国人がそれぞれの国歌に対する場合、上に劣らぬ国民感情を以てする事は言うまでもない。

「国歌」という一事からの推論、考察ではあるが、しかし国歌は国民精神の象徴であり、国民的連帯感情の紐帯をなすと言う事が出来よう。それ故、その内容と共にこれがその国民により如何に扱われているかは、国民の連帯感情の度合と性質を計る有力な手がかりを成していると考えられる。

ともあれ上記すべての考察から、わが国民の間に、積極性と一致 **unity** とを自他共に感ぜしめる連帯感乃至連帯感情は、未だ遍在の域に達していない事は明らかにされたと思う。われわれは、終戦を境として、自由な、

民主主義的な、国際的精神に富む国家理念にかたく基礎を置いて、新しい道に踏み出し、すでに年月を経過している。しかしそのような大前提乃至は要請をみだす努力に欠ける所があつてはならないと同時に、活々如たる主体性に事欠くことがあつてはならない。主体性、自主性の欠けた国民が、国際社会に在って、また——誇大の言を用いるつもりではないが——世界史的立場に於て意義と価値とを有たぬ国民的存在である事は明白である。そして国民として主体性を有っているという事は、そこにまとまりが有り、多様多数なる成員を横に1つに結ぶ、細くとも強靱で欠かす事の出来ない何等かのきずなの存している事だと私は思う。その様な場合には、必然的に、そこには或るまとまりと連帯感を感じしめる国民的連帯感情が随伴し、流通しまた発現する筈だと思う。この様な考察から筆者は、結果として生起すべきものを一目標とし、その醸成が顧慮され図らるべきであるとの見解のもとに、本項の主題を、われわれの精神的課題の1つとして立てたのである。(未完) (本学教授)

註1 これは、A. Hauck 編集の RE「新教神学及教会百科辞典」第二十三卷 所載 Heinrich Lotzky による C. Hilty 伝に、ヒルティの言葉として記述されたものの和訳、該書 648 頁。

2 L'âme française, par Paul Gaultier, de l'Institut. Flammarion, 1936.

On Education and Christianity in Japan

—Preliminary Part—

(English Résumé)

Mitsuhiko Sekiya

Prior to dealing with the problem 'On Education and Christianity in Japan,' I feel the necessity of considering about our moral tasks in contemporary Japan.

In the beginning the significance of such inquiry is briefly stated. Then two of these tasks are pointed out in this paper, and some attempts to clarify them are made.

The first task pertains to 'peace'; to mould the Japanese people as "peace-loving people" ultimately aiming at building 'peace-making nation.'

The second aims at fostering the feeling of solidarity among people which is lacking at present.